22　樋口大尉小児を扶くる　浅井忠

明治二十八年（一八九五）　油彩・カンヴァス
七四・八×一〇二・一

日清戦争に従軍した第六師団大隊長樋口誠三郎大尉が、威海衛で捨てられた幼児を見つけ、その子供を抱きかかえて行軍しながら母親を捜したという戦時美談を絵画化した作品。背景となる石造りの建物の輪郭は明瞭ではなく、また地面の上にはうっすらと雪が積もっているのだろうか、どちらも点描のような小さなタッチを重ねることで複雑な色相を構成しながら描かれている。同時期の他の明治美術会の洋画家が、明暗の強いはっきりとした輪郭を人物に与え劇的な効果を生み出しているのに対し、細かい筆触を重ねて画面の隅々まで色の配合、絵肌の緻密さを意識しているのが、作者浅井忠の特徴である。渡仏以降の浅井の作品には、現地で流行していた印象派の影響を指摘する向きもあるが、本図からもわかるように、黒田清輝ら新帰朝者の画風を意識しているふしもみられ、点描を重ねてゆく新しい油彩描法を確立していた。本図は明治二十八年の第七回明治美術会展覧会にて御買上となった作品である。浅井は同年の第四回内国勧業博覧会にも、同じく日清戦争を題材とした「旅順戦後の捜索」（東京国立博物館蔵）を出品し、妙技二等賞を受賞している。前年の日清戦争開戦を受けて、浅井は『時事新報』の通信員として戦地に派遣され、同年末に帰国するまで各地を取材した。その際のスケッチを元にこれらの作品を制作したほか、多色石版刷の「従征画稿」を同二十八年九月に発行した。画面右下に「C. Asai／2555」とサインと皇紀による制作年が記される。

浅井忠（一八五六～一九〇七）は江戸に生まれ、最初は国沢新九郎の画塾彰技堂で洋画を学び、明治九年に開校した工部美術学校に入学して、イタリアから来日したフォンタネージの指導を受けた。同二十二年に小山正太郎、松岡壽らと明治美術会を創立、同三十一年には東京美術学校教授に就任した。同三十三年から三十五年にかけてフランスへ留学し、同地でアール・ヌーヴォー様式に影響を受けて、のちには工芸図案も手がけた。帰国後は京都に創設された京都高等工芸学校教授、関西美術院の初代院長に就任し、関西の洋画家の育成に尽力した。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近代の洋画家、創作の眼差し
三の丸尚蔵館展覧会図録No.52

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年十月三十日発行

©2010, The Museum of the Imperial Collections